

勝ち抜く就職活動のために

序

現在の就活の状況は甘くない、しかしながら就活の指導状況を見ると、どうも内定を得られなかった人に対する対策が、当を得ていないと思うことが少なからずある。

私は、ある企業で新入社員の受け入れ研修などを 20 年程度経験し、さらに学外講師として大学生に対するお付き合いも経験した。

この経験を活かして、就活に関して求められている人材を明らかにすることで、内定が得られなかった場合にでも、自分がどのような方向で、力をつければ、次のチャレンジで成功するか方向付けを与えたいと思う。

私の経験では、企業は将来の可能性を秘めた頭の良い自分で成長する人材を求めている。そして、少しぐらい失敗にも耐えて打たれ強く活動する人材を求めている。

このように、求められる人間になる、お手伝いをしたいと思って、これを書いた。

1 章から 5 章までは、就活のターゲットを明確にするため、なぜ総合職正社員での就活をするかと言う動機づけを行っている。なお、ここでは採用側の目線で書いた文もある。常に、採用側の観点を意識することは、就活で勝利するための重要な要素であることを知っておいてほしい。次に、6 章では総合職で採用する側の目の付け所について書いた。その中で書いたのは、会社が求めているのは、頭が良くてしかもこれからも会社で成長する人材である。そして 7 章から 12 章は、頭が良いと評価される人材になるための方向付けを行った。13 章と 14 章は、今後の成長可能性を示すための、自己成長力について書いた。

最後の 15 章は、少し趣向を変えて、今からでもできる自己鍛錬の項目を挙げた。

目次

1. なぜ就職か	3
2. なぜ正社員で採用するのか	3
3. 仕事の種類	4
4. 総合職か一般職か	4
5. 広い目で見たメリット(社会貢献)……	5
6. 総合職として求められる人材……	5
7. 頭が良いと評価されるために……	6
8. 知識の活かし方	6
9. 理論的知識からモデルを作る場合……	8
10. 経験的知識の使い方	8
11. 経験と理論の統合	9
12. 会話での頭の良さ	9
13. 忍耐力と訓練について	10
14. 計画と失敗の経験	11
14-1 計画段階	11
14.2 実行段階	11
14.3 確認段階	12
14.4 改善段階	12
14.5 打たれ強い行動	12
15. 今後の対策	13
15-1 小学校の算数の文章問題を解く	13
15-2 新聞のコラムの書き写し	13
15-3 人の話を聞き取る訓練	13
15-4 文学的な読み方	14
15-5 論理的な文章力の訓練	14

1. なぜ就職か

現在の就職活動は、10/1 時点で 2013 年春入社の大卒内定率が 63.1%と、依然厳しい状況である。そして、2014 年度の就活が、この 12 月から始まった。ここでは、正社員で総合職採用を目指す就活中の学生に対し、企業側で採用および新人教育の経験した立場からアドバイスを送りたい。

はじめに、正社員で就職するということについて考えて欲しい。皆さんはなぜ、就職するのであろうか。皆がしているから、自分もしないと格好が悪い、などと言う理由もあるかもしれない。しかし、今だけでなく、10 年後、20 年後そして 30 年後の自分を考えて見よう。その時の自分の生活をどう支えているか考えて見よう。それが難しいなら、子供を大学に通わせている、親の立場になったと想像してもよい。ただし、君たちの親御さんたちは、若い時代はまだ日本の国に活力があり、曲がりなりにも経済成長が期待できる時代であり、ある程度の地位を得て、それなりの収入を得て、君たちを大学に行かせることができた人が多いと思う。また、社会全体にまだ活力と余力があり、経済的に皆で支え合うことも少なくなかった。

しかしながら、今の世の中は、既に経済成長が続くかどうかは、期待できるものではなくなっている。さらに、経済的にも余裕がなくなってくるので、自分と家族の生活費は、自分で稼ぐ必要が、今まで以上に厳しくなってくる。これが、20 年から 30 年後の社会である。そのような時、しっかりした収入を確保していることの有利さは、言うまでもないだろう。特に、女性も結婚して、養ってくれる相手を見つけるという発想は、難しくなっている。逆に活躍している公認会計士には、主夫に子供を見させている人もいる。

さて就職するときに期待できるメリットの一つが、長期的に安定した収入の確保と言うことについて、同意いただけたであろう。

2. なぜ正社員で採用するのか

次に見方を変えて、諸君を採用する企業の立場で、なぜ長期雇用契約で正社員に採用するのか、動機を考えて見よう。

まず逆に、非正規雇用で仕事を遂行することの経営側の利点も考えて見よう。例えば、外資系のファーストフードの店では、マニュアルがしっかりしていて、大方の作業はアルバイトの店員が対応している。このような運営の利点は以下のとおりである。

- 1) アルバイトの時給は安く抑えることができる
- 2) 負荷の変動に応じて人員を加減できるので最適な人件費で運営できる
つまり、人件費を抑えることができるのが、大きなメリットである。
ここで、正社員にしたときのメリットは何があるか、考えて見よう。

- 1) 継続的に仕事をするので、知識やスキルの蓄積向上ができる
- 2) 収入保証により生活が安定するので会社に対し忠誠心を期待できる

大きく言って、この 2 点がメリットであろう。このメリットが、上記の人件費のデメリットを上回る場合に、会社は正社員として雇用するのである。

つまり会社にとって、知識やスキルの蓄積向上を期待でき、しかも忠誠心を発揮できる人材を、求めているのである。

従って、採用されたいと思うならば、この 2 点の可能性を認めてもらわないといけない。

ここで、『可能性』に注意してほしい。正社員と言うのは、長期継続雇用と言うことで長期的な力の発揮が必要である。そのためには、現状の力もさることながら、今後とも成長する**可能性**が重要である。現在の力だけで評価するなら、高給の契約社員でよい。

3. 仕事の種類

仕事の種類には、色々な分類があるが、個人能力の蓄積と言う面では、以下の3分類が解りやすい。

表1 スキルベース、ルールベース、知識ベースの仕事

スキルベースの仕事	個人のスキルに頼る仕事、技の世界で、経験と訓練の積み重ねの効果を期待。モノづくりの匠や、高度の対人能力の世界。一般職・専門職の世界。
ルールベースの仕事	ルール通りの仕事を遂行する世界。いわゆるマニュアル通りの仕事の世界で、アルバイトなどに依存する場合が多い。非正規雇用でも可能。
知識ベースの仕事	個人並びに集団の知識を総合的に検討して、判断提案する仕事。経験と基礎知識の活用能力が必要である。総合職の世界。

さて、今までの議論と対応して、正社員として必要な人材は、どの仕事であろうか。上記のスキルベースの仕事と知識ベースの仕事は、経験を積むことで蓄積の効果が出る。しかしながら、ルールベースの仕事に関しては、マニュアルがしっかりしたら誰でも交代が利くという状況であり、人件費が安く、負荷変動に柔軟に対応できる、アルバイトでも構わないということになる。

従って、正社員の雇用を目指す場合には、表1のスキルベースの仕事か知識ベースの仕事のどちらかを担当すると言うことで、活動しないとイケない。マニュアル人間には、正社員の道は難しいものになる。また、指示待ち人間に関しても同様である。指示を受けるだけなら、マニュアル人間と変わらない。自立して行動する人材を企業が求めている。

なお、技術の進歩に従い、上記区分も変化することがある。例えば、30年ほど前なら、種々の前例を単に覚えているというだけでも、知識ベースの仕事として通る場合もあった。また英語ができ、アメリカの文献を理解できるというだけで、総合職としての価値を示したこともあった。しかしながら、現在はIT化ネット化しているので、前例などは適切な検索を行えば直ぐに入手できることも多い。また、英語文献の日本語化も速やかに行われるようになってきている。従って、総合職に値するためには、頭の良い思考力が必要である。

4. 総合職か一般職か

さて、上記のスキルベースの仕事と知識ベースの仕事のどちらを目標として、就活を行うべきであろうか。結論を先に言うと、大学を卒業した場合には、知識ベースの総合職を狙うべきである。

理由は、スキルベースに関しては、経験や訓練により身につくものが大きい。従って、できるだけ早く働いて、若い時から仕事を通して身につけたものが大きな意味を持つ。つまり、大卒より高卒、高卒より中卒の方が有利なのである。

一方、知識ベースの仕事においては、基礎的な知識や知識の使い方は、大学での教育で

身に着けたものを活かす機会も多い。こう考えると、総合職での就職を狙うのが、大卒者の就活としては、正しい目標である。なお、技術系の場合の、高度な専門職も良い目標である。要するに知識が生きる職場を狙うべきである。

ただし、一部の営業の一般職採用では、単にお客様の年齢層を考えて大卒者を採用する事例もある。

5. 広い目で見たメリット(社会貢献)

このような総合職での就職には、社会的な責任を果たす義務と言う側面もある。まず、単純に考えても、現在の税収入はあまり伸びないと言うことで国も地方自治体も、頭を悩ませている。そこであなたが働き、しっかり給与を得て活躍することは、納税と言う社会に対する基本的な貢献となる。国民の義務として、しっかり納税をすると言うことが第一であることを、認識してほしい。

次に、総合職としての活躍は、多くの付加価値を生み出すことである。その付加価値の実現には、色々な人がかかわっているので、雇用を生み出すことにつながっている。今の日本は、物が売れないという話をする人が多いが、売れるようにしたらまだまだ売れる可能性を秘めている。そのような可能性を現実にするのが、総合職の仕事である。今直ぐにできる仕事ではないが、10年先にこのような貢献ができるように頑張してほしい。

6. 総合職として求められる人材

もう一度、採用者の立場に戻って考えて見よう。正規雇用で採用と言うことは、現在の能力もさることながら、今後の成長可能性と忠誠心が重要と言うことは既に述べた。ここで総合職の潜在的可能性とは、何があるだろうか。それはズバリ言うと、

『頭の良さ』

である。もう一つ言えば、

『必要なスキルを身に着けるだけの、忍耐力と自己の鍛錬力』

も必要である。このためには、学生時代に何かの能力を、苦心して身に着けた経験があれば、その応用が他でもできると期待できる。『体育会系』の学生を求めるのは、単に

「言うことを聞いて頑丈でよく働く」

と言うだけではない。必要なものを、繰り返し訓練して身に着ける経験をしているからである。悪名高い、「有名大学出身者を求める」動きにも、入試の努力を評価する面もある。また英語能力でTOEICの点が高い時、その努力を評価する場合もある。

さて、話を戻して、『頭が良い』に関して、考えて見よう。ここで大切なことは、

『就活に於いて頭の良さは、採用側が感じるものである』

と言う基本的な事実である。もう一付け加えれば、頭の良さは、知識の量や学校の成績で評価できるものではない。採用側も本当に頭の良い人間を、選ぶためには種々苦勞をしている。現在のところ、そのための主要な手段は大きく分けて以下の3通りである。

- 1) SPI等の適性検査の成績
- 2) 小論文などの文章評価(エントリーシートの内容も含む)
- 3) 面接の受け答え(主観的印象)

また資格やTOEICの成績なども参考情報となる場合もある。ただし、これらは必要条

件として、足切に使われる程度である。

7. 頭が良いと評価されるために

頭が良いと評価を受けることは、学校の成績だけではない。これは、自分たちの経験でも明らかであろう。自分が人の頭の良さをどう感じるか考えてみよう。人が他人の頭の良さを認識するのは、学生時代なら、成績で見ることもあるだろうが、多くは対話などの行動を通じてである。例えば、以下のようなパターンは頭が良いと、感じるのではないかな。

「難しいことを解りやすく説明してくれる人」

人が理解できないようなことを、かみ砕いてわかりやすく説明する。本質をつかんで、上手にたとえ話を使いながら説明する。聞き手のレベルに合わせて説明する。このような能力があれば、聞いていて頭が良いと感じるであろう。

このような力を、就活の各段階で、認めてもらうためには、どうしたらよいであろうか？

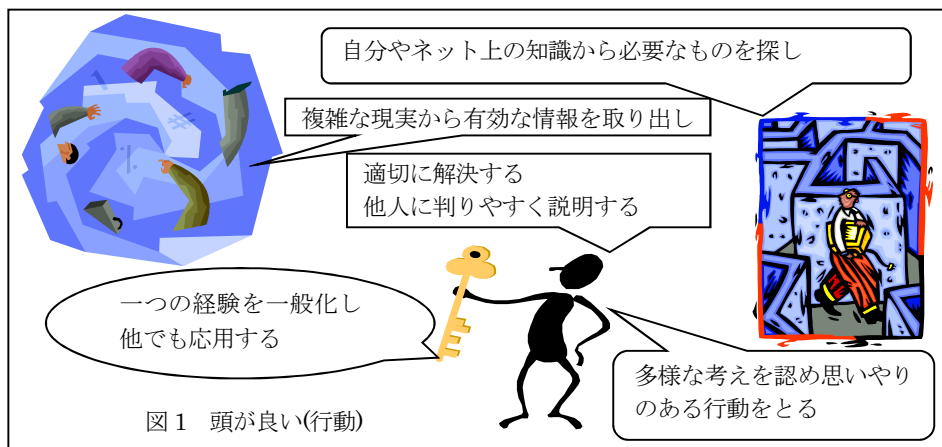
個別の対策は色々あるが、基本的には知識の活かし方と言う、方法論を身に着けることが大切である。また、それを実現するための、スキルの訓練も大切である。これからは、まず以下の8章から11章では知識の活かし方として、モデルの作成について述べる。

8. 知識の活かし方

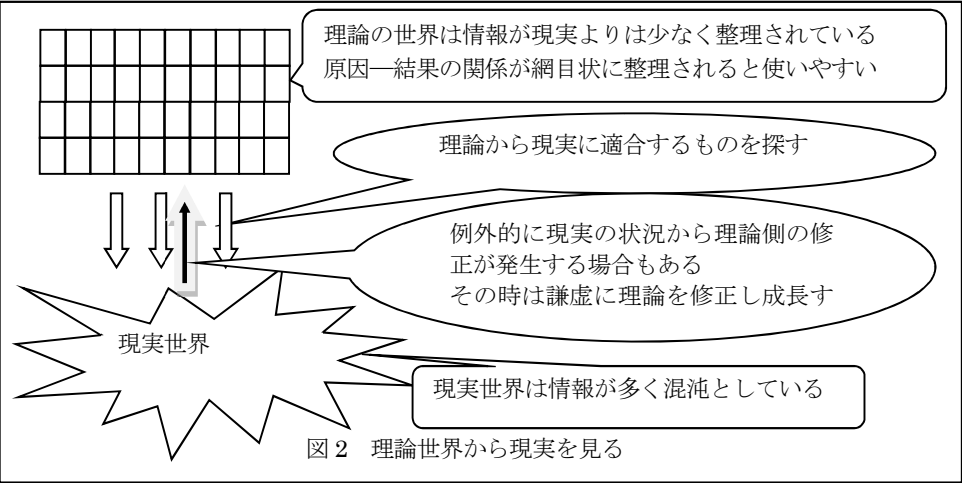
一般に『頭が良い』といわれる人は、色々な知識を活用して、実際の問題解決に役立つように、判りやすく説明する力がある。さらに、「一を聴いて十を知る」と言う風に、複雑な現実から本質を見抜き、一般化して情報を引き出す力にも優れている。

また、自分の体験の中でも多くの情報が溢れているが、その中でも必要なものを取り出し、後で活用することが一つの条件である。単に昔のことを記憶するのではなく、使えるように整理して記憶する人である。感受性が鋭いことも、頭の良さに関係するが、鋭く感じた物の意味をしっかりと考えることも、必要である。

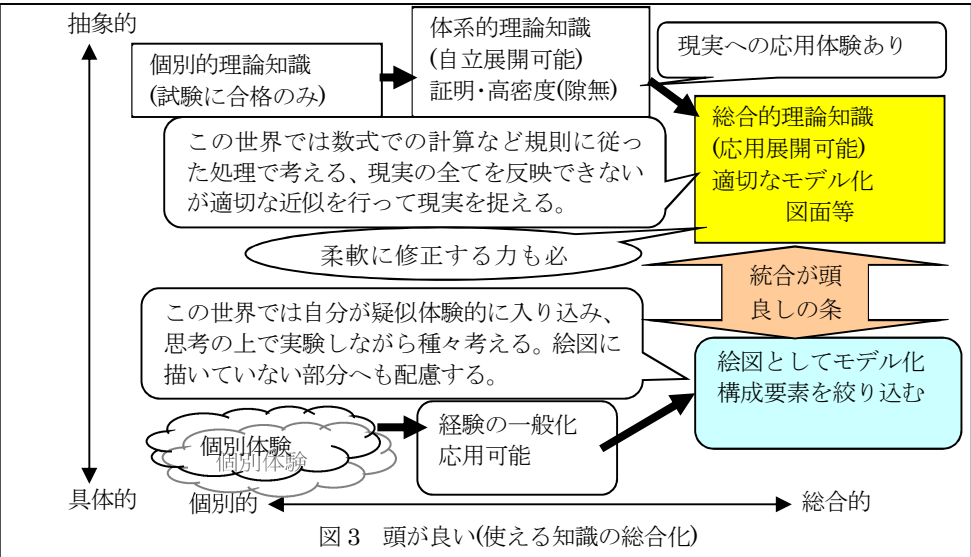
理論的な知識を活かして、原因－結果の両面で現実とマッチングを図ることは、現実の混乱状況から必要情報を選び出すために、有効である。



ここで大切なことは、理論を使えるようにしっかり理解しておき、理論の世界だけでも原因—結果の関係が繋がっていることである。これが網の目となって、要所から現実へと対応をとるのが使える知識となる一つの条件である。



このような、頭の良さを実現する為には、理論的な知識と、経験的知識を体系付けて、総合的にまとめるスキルが必要である。このようなスキルは、実際に使うことで磨かれる。なお、理論はあくまで理論が成立するある種の仮想的な条件であり、複雑な現実と対峙した時には、修正すべき状況も生じる。このような理論側の修正を行いうる力があれば、理論に使われるのではなく、理論を使うことができるようになる。



特に、モデル化した世界の中で、シミュレーション的に動き回ることによって新しい発想を得ることが多くある。以下ではモデルの作り方と使い方について、もう少し補足する。

9. 理論的知識からモデルを作る場合

学校などで学ぶ知識は、まず試験を合格する為に、断片的に記憶していくことが多い。この知識をいくら集めても、丁度それに当てはまる状況でもなければ使えない。しかし、この知識を定義・公理等で体系化して、きちんと証明が出来るようにしていくと、網目状の体系的な理論知識となってきた、少しは応用が利くようになる。このような知識の体系化は、演習問題などを多数解くことでも身についてくる。断片的な知識が、体系的に整理されたのが、次の段階である。

しかし、このような理論的な知識が適用できるのは、理想的な世界である。例えば、野球において、ボールの形状が変化しないで、完全弾性衝突するとして物理学の式で解析したら、『**重い球という物は存在しない**』と言ってしまふ。しかし、現実には、ボール自体もバットと当たった衝撃で変化するし、当たったときに滑るか、芯まで衝撃が届くかにより、ボールの受ける力は変化する。また、風向・風速・温度・湿度など空気の状態や、バットの表面状況まで考慮すると、『重いボール』と『軽いボール』は存在する可能性は十分ある。現場の選手や監督・コーチが、

「**重いボールと軽いボールは存在する。**」

と言っている以上は、現実を受け止めて、他の分野の知識も加味して検討しないといけない。そこで、ボールを外側と芯の**2重の球**でモデル化するなどの、適当な近似条件で図式にして、モデルの上で必要事項を加味した検討を行うことで『**重いボール**』が説明できる。このような段階を経て、理論が実際に使えるようになってくる。なおこれは自然科学だけでなく、社会科学でも同様の検討が必要である。

具体的に知識を使う場合には、理論的に作ったモデルの方から現実との対応を探し、原因と結果の両面でマッチングした時、この理論が使えるようになる。

10. 経験的知識の使い方

一つのことを経験した時に、その意味を考えて改善したりする仕事ぶりは、『頭が良い』と評価されることがある。しかし、多くの人が頭の良さを評価されるのは、経験を一般化し応用を利かせるようになるレベル、が多い。例えば、上で述べた野球の例では、

「**XX 投手の球を打ったとき思ったより飛ばなかった。彼の球は重い。**」

と言うだけでなく、

「**回転しない球は重い。**」

と言う一般的な見方から、

「**XX 投手の球は回転が少ないから重い。**」

と言う場合には一般化して応用が利く考えと評価される。

しかし、本当に頭の良い行動には、その状況を全体的に見て周辺まで配慮を配ることが必要である。全体像を、遠近感のある絵のように優先度を付けて思い浮かべることが出来れば、しっかりした仕事ができるようになる。このためには、前にも書いたように理論的知識を活かして、説明することも有効である。

更に、自分が描いた絵図の中に入り込み、色々と想像をしながら新しいモノを創造する人を、人は『頭が良い』または『天才』と言う。

一般に、理論的知識は、複雑な数式などで因果関係を示すが、実際の説明には、単純に原因と結果の関係、そしていくつかのフィードバックの要素を示せば、十分説明できることが多い。逆にそれぐらい単純化できないと、効果的な説明はできなくなる。

なお、経験には

「その仕事に必要なスキルを身につける」

と言う要素もある。このようなスキル鍛錬のためには、ある程度の繰り返しが必要である。この必要性を認識し、単純作業であってもきちんと身につける姿勢は、一見では「頭の良さとは関係なさそう」に見える。しかし、この必要性を考えて、自分の鍛錬をきちんと行う姿勢は、『頭が良い』と人に言われていても敵を作らない大切な要素である。

11. 経験と理論の統合

上記の理論面と経験が、お互いに上手く交わると、『本当に頭の良い人』と言えるようになる。このような人の行動は

「知識が現実の場で使えるようになる。」

経験したものの理論的説明がきちんとでき、説明がわかりやすい。

経験と理路が一体になった世界に棲み込み新しい発想が出る。」

等の特性がある。

なお、理論の限界もよく心得ていて、複雑な現実の前には、理論の不備を常に疑い謙虚にモデル修正をする力も持っている。現実と理論の間で、相互の緊張があると、理論が成長していく。

特に社会科学の理論は、経済学の「市場主義と政府の役割重視」のように、多様な見方があるという前提で考えているので、現実との緊張関係が意識しやすい。しかし、物理学を母体にした工学の世界でも、近似条件などでわざと見なかったものが存在する。それらは、多くは雑音として統計処理して、影響を排除するが、時によってはモデルに組み込む必要もある。天文学からニュートン力学が生まれたのは、太陽系が太陽と地球または地球と月のように、一対一で考えることができるような、簡単な構造だったからである。このような大きなものに、摂動を加え修正して、工学は成立している。

12. 会話での頭の良さ

会話をしている、相手が頭が良いと感じるのはどのような時であろうか。会話の内容をきちんと把握し、適切な応答を返してきたら頭が良いと感じるであろう。ここで大切なことは、自分と相手が同じ価値観・評価尺度や概念を持っていると思込めないことである。相手の立場に共感を持つことは、スムーズなコミュニケーションには有効であるが、相手の立場が違うことがある。また、「価値観も違いがある」と考えることも大切である。

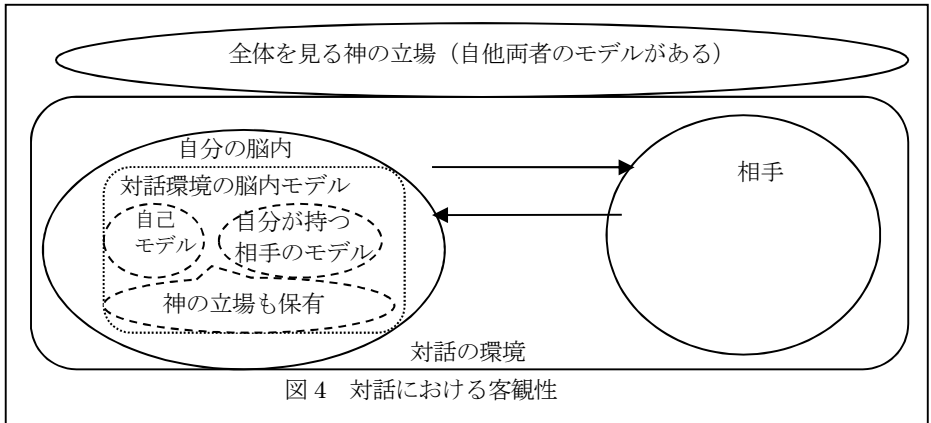
このとき、相手にも理のあることを認識した上で、動作原理や判断基準を推定することが出来れば、頭の良さと柔軟性を示すことになる。この力で、良い考え方を自分のモノとすることもできる。このためにも、相手のよさを引き出すことは大切である。人の良さを引き出すことで、自分のよさも認めてもらうことが出来る。また人の良いところを自分の

ものに、取り入れることが出来る。

更に、他人の対話を見て、客観的に評価し、良いところを見出す姿勢も重要である。この様な客観的な評価を、自分の時にも行えるようになると、自然に改善が進むようになる。

このような自律的に改善することが、頭が良いといわれる条件である。

上記の議論をまとめたのが、図4である。相手の思考に関して、自分の脳内にモデルを作る。更に対話環境自体をモデル化して客観的に見る。更に神の立場で、対話自体をみる。このように神の立場に立って、全体を見ながら改善することは、頭の良いといわれる一つの条件である。



13. 忍耐力と訓練について

前に書いたが、採用したくなる一つの条件は必要な能力を身に着ける、忍耐と鍛錬の力である。これは、今までの生活で、自分ができなかったことを努力してできるようになった経験があり、今後とも逃げずに立ち向かう姿勢を、問われているのである。

いわゆる、有名大学優遇には、受験勉強の場で行った努力を評価している面もある。また、仕事を遂行するためには、必要なスキルを身に着ける必要がある。極端な例では、「言葉聞き取る、メモを取る」と言う様な基本的な作業も、適切な速度で、間違いなく行うためには、ある程度の繰り返し訓練が必要である。なお、この訓練回数は、個人差が大きく一律に決まるものではない。繰り返し訓練し、日常で使用することで自然と身につくものである。このような自主的なスキル訓練は、会社生活でもいろいろと使用する機会がある。スキル訓練の経験があると言うことは、就活でのPR材料として有効である。

このような面を考えると、部活やアルバイトでの習熟体験と言うものが一つのPR材料になってくる。この時には、具体的にどのようなスキルを、自主的に練習を繰り返し、習熟させたかを、言えることが大切である。

また、学生時代の卒業研究や修士の論文作成においても、いかなる工夫をしたか、難しいものを自分の努力で解決したかが、一つのPR項目となる。さらに言えば、その時どのような事柄を学んだか、それはどのように一般化できるかといえ、なおよい。

一方、このような経験がない場合にも、見直すと他にも同様のスキル習得の場面がある。

例えば、英語のヒアリングに関しても、同じところを CD で繰り返し聞く、英語の講座を継続して聞く、ラジオの英語のニュースを毎日聞く、などの繰り返しで身に着けた人もあると思う。このような経験を他に生かせば、会社でも必要なスキルを身に着けることができる」と示すことができる。

今迄このような経験がない場合にも、今からでも英語習得などの経験を作ればよい。就活を通じて成長する機会を得たと。前向きに考えることが大切である。

14. 計画と失敗の経験

仕事の実行時は、PDCA(計画→実行→確認→改善)のサイクルを回すことが大切である。このような習慣は、学生時代から身に付けておくことが大事である。

さて、このような PDCA のサイクルを回すと言っても、

「いつも計画通りです」

と答える場合がある。これは、計画通りに仕事が出来ているので、悪いことではないと考えるかもしれない。確かに、会社の定常的な生産の場合には、このように計画通りの進行と言うことは大切である。

ここで注意すべきは計画の内容である。チャレンジしなければ失敗はしない。極端な話、「何もしない」と言う計画なら、寝ているだけで達成できる。そこまで行かなくても、自分の能力に対して、余裕を十分見た計画を立てた場合には、失敗が少なくなる。例えば、今までの高校受験、大学受験などでも「余裕を見た進学先」と言う指導を受けた場合もあるだろう。このような場合に、『落第と言う失敗』の経験はなくなる。しかし、落第の経験があったら、自分の弱点をもう一度見直して、勉強し直す『確認→改善』の活動が行われる。このような経験を通じて、自分が成長した経験は貴重である。

このように、適切なチャレンジ目標を計画し、実行する。その結果が失敗になっても、その過程を確認し反省する。そして改善点を見出すことで、自分の力を増していく。このような動きこそ、本当の PDCA サイクルを回すことになる。

ここで、各段階で大切なことを挙げておく。

14.1 計画段階

計画するときは、その目的をしっかりと考えて、どの程度のリスクを許容できるか考えて、計画する。リスクが許容できるときは、できるだけチャレンジすることが望ましい。安全サイドの余裕を持った計画だけでは、チャレンジ精神が失われてしまう。リスクを広い目で評価することが大切である。例えば、家庭の状況が許す環境なら、浪人を覚悟で上位の大学を受験するようなものである。

また、失敗が許されない改革の場合には、予備を見込むことも大切である。一旦計画に合わなくなっても、その予備で取り戻せるようにする。このような工夫も大切である。特に全体としての失敗は許されない場合でも、部分的にチャレンジし、失敗したらリカバリが可能と言う場合もある。このような時、できる限りチャレンジしておく、今後ともチャレンジ性の高い生活習慣となっていく。

14.2 実行段階

何事も実行することが大切である。計画したら、それを実行する。ここで重要なことは、節目毎に確認をすることである。学校の様に試験してもらって始めてわかる、ではなく自分の方法で、ここまでの仕事の完了状況の良否を確認することが、自立するための一歩である。このような生活習慣は、今後とも大切である。

14.3 確認段階

計画の完了段階では成果を確認する。特に失敗に終わった場合には、その理由を明確にする。なぜを何度も繰り返して、真の原因にまでさかのぼることで、今後の改善項目が見えてくる。この段階で、自分に厳しく追及することが大切である。確かに、社会環境など外部の原因によって、失敗することは多い。しかし、それを想定しなかった自分の甘さと言うことは、反省要因として考えることができる。

こうしてしっかりした原因追究を行っていくと、次に行うべき対策が自然と見えてくる。この段階では、責任追及的な見方よりあくまで客観的かつ冷静に見ることが大切である。

14.4 改善段階

この段階が一番重要であるが、上記の確認段階で真の原因が見えていると、後は自分でできる対策を考えればよい。特に、自分でできることを考えることが重要である。例えば、先輩などから、依頼事項の割り込みを受けたとする。このような割り込みをした先輩が割るのではなく、その割り込みを予測できなかったかと、自分でできることを考える姿勢が重要である。自分でできることを、広く考えることで、改善すべき事項が見えてくる。

この改善をしっかりと行うことで、自律的に成長することができるようになる。昨日より今日、今日より明日と毎日成長することが可能になる。特に、読み書きのスピードなど基礎的なスキルが問題とわかれば、しっかり自分で訓練を考えて実行する。このような経験した、人財を企業は求めているのである。

14.5 打たれ強い行動

このように、計画通りの実行ができないと言うことも、一つの失敗である。その失敗をきちんと生かして、成長につなげると言う経験を積むことは、自分を強くすることができる。チャレンジして、失敗しても次のチャレンジを行う。このような行動を行いやすくするためにも、日ごろから『計画未達成』という『小さな失敗』を克服しておくことで、大きな失敗に対しても、対抗力が付くようになる。

このような力は、就活においても役立つし、仕事の上でも役に立つ力となる。

失敗の活かし方を知っていると言うことも、貴重な能力である。

企業が求めているのは、猪突猛進して結果を顧みないドンキホーテでもないし、悩むだけで行動に移せないハムレットでもない。失敗をしっかりと生かす、エジソンを求めているのである。

15.今後の対策

とりあえず、自分の状況を冷静に見てみよう。今まで学校で学んだ知識の内、どれだけ素人に上手に説明できるものがあるだろう。そして、身につけているスキルはどれだけあ

るだろうか？ここで大切なことは、低いレベルであっても、少しでもあるものを認めることである。そしてそれを自分で育てていく過程が、他の分野での成長にもつながっていく。まず出来そうなことからやっていくことが重要である。

まず、一般的な項目について考えて見よう。今まで触れずにいたが、採用試験では、色々な種類の適性検査を受けることが多い。SPI 等が代表的なモノである。これらの対策本の使い方であるが、まず一度は目を通しておくことを勧める。理由は、問題パターンについて、知って問題に向かう場合と、どのような問題が出るかわからず問題に向かう場合とでは、かなり違いが出るからである。筆者の経験でも、TOEIC を初めて受けた時は問題パターンに慣れなかったが、2 回目を受けた時は、感じがつかめたので 10% 程度点数がアップした経験がある。付け刃の実力アップでなく、不慣れなために実力を出し切れないことがないように対策をすると考えるべきである。

次に、行うべきは、スキルの訓練である。これには、何通りかの方法があり、自分の実力に合わせて、適当なものを選んで実行してほしい。

15.1 小学校の算数の文章問題を解く

これは、8 章～10 章で述べた、モデルの作成の初歩的な段階の訓練でもある。また、文章読解の訓練としても、論理的な文章を速く読み、理解する訓練としても有効である。悪名高い鶴亀算でも、「鶴の足は 2 本、亀の足は 4 本と言う特徴を捉えて、足の総数と言う図式を描く。」作業は、モデル化する初歩の訓練である。確かに一次方程式にすれば、機械的に解けるが、このようにモデル化して、意味を考える訓練をすることは、説明する能力をつけることにもなる。

この場合も、できるだけ多くの問題に当たり、短時間で問題文を読み解く訓練も行うことで、スキル訓練の方法を身に着けることにもなる。

15.2 新聞のコラムの書き写し

朝日新聞が、コラムの『天声人語』を書き写すノートを発売している。この訓練も成果が大きい。ある種の適性検査では、天声人語の 1 日分をそのまま出題して、段落分けさせ、要旨を記述させている。このような文章に慣れることも大切な訓練である。

なお、書き写しを手書きで行うことは、手書きに慣れる効果もある。今のように、パソコンや携帯が普及すると、どうしても手書きの文字を書く機会が少なくなり、漢字を書けなくなったりする。しかしながら、試験場においてはまだ手書きの場合も多くある。特に小論文などは、まとまった文字数を書く訓練ができていないと、手が動かなくなってそれだけでも成績が悪くなる。

15.3 人の話を聞き取る訓練

上にも書いたが、メールが普及した現在では、文字によるコミュニケーションが主体になり、人の話を聞き取る能力が弱くなっている。しかしながら、面接が試験に占める比重は大きい。従って、人の言うことをきちんと聞き取り、的確に理解することは重要なスキルである。このため、まず聞き取る訓練から始めるとよい。

聞き取りの訓練は、一つはテレビの利用である。テレビの解説番組で言っている内容を、

メモして後で、自分一人で説明できるか試してみる。多分最初は聴き落としが出ると思う。そこで、ビデオなどで再確認すると、どこで聞き落としが解るようになる。このような訓練を続けていくと、人の話を聞くと言うことが解ってくる。

なお、聞き取りの訓練の一番大きな機会は、学校の講義である。きちんと聞きノートにまとめる。そして、そのノートを見ただけで、講義内容を自分で説明できる。このような訓練ができていれば、人の話を聞く訓練ができている。

ここで聞き取りに関して注意すべきことがある。一字一句にこだわらないことである。確かにカウンセリングなどで、プロとして聴く場合には、一字一句へのこだわりも必要であるが、一般には少しぐらいの聴き流しがあっても、意味はとれるものである。変に細部にこだわらず、会話の流れに乗って理解し、メモを取るようにしていくべきである。面接でも、細部にこだわって失敗することが多い。

15.4 文学的な読み方

今まで書いた文章の力は、どちらかといえば、意味重視の論理的な文章であった。しかし人間は、論理だけで動くものではない。人には感情があることを理解していないといけない。そのためには、文学的な文章を、その登場者の心に寄り添って読むことも大切である。文章読解とは、まず意味をきちんとつかむ、その上で心まで踏み込んでいくのである。

例えば、森鴎外などの短編を読むのもよいだろう。本当は、長編小説の方が、色々と背景もわかり登場人物の心を、より理解しやすいのだが、最後まで読み通す力が着いていない場合にはとりあえず短いものでも読み終える体験が大切である。

このように、人の心に寄り添う力は、現在弱くなっていると思う。しかし仕事をするのも人間、物を買ってくれるのも人間である。多様な考えのある、他の人の心を理解できない人間には、大きな仕事はできないと思う。

15.5 論理的な文章力の訓練

論理的な文章を自分で作る訓練としては、今まで大学で書いた、学生実験などのレポートを書き直してみるのも効果的である。実験レポートでは特に、考察の部分が大切である。今までの教科書的な定説に対し、実験では、理論値通りの答えを得ることができなかった。この理由を、自分はどうのように考えるか記述するのが考察である。従って以下のようなパターンで、考察を進めるが、これをきちんとできる学生は少なくなっている。言い換えれば、このような考察ができる力は PR 事項となっている。

従来の**説では、XX だから YY となる。

しかし、私の観察では、XX だが ZZ となっている。

この理由は、XX 以外に WW が影響しているからである。

図 5 考察のパターン

このような図式を意識して、文章をまとめる訓練すれば、魅力的な能力のある学生に見えるであろう。またこのような訓練を通じて、自分を成長させた学生は、企業に入っても能力を伸ばし、成長することが期待できる。